



吉川英梨

2019年末、できたてほやほやの『海蝶』のプロットを読んだ編集さんと打ち合わせしました。

デビューから10年以上たち、プロットを書き直すということは殆どなかったのですが、目の前の編集担当は渋い顔。私は落ち着かなくて、立ち昇るコーヒーの湯気をじっと見つめていたのを覚えています。

案の定、あの「大問題」を指摘されました。

「主人公の忍海愛がどうして潜水士を目指すのが弱い。たくさん取材されているから海保のリアリティがよく出ている分“女性が潜水士をやるのはこんなに大変なのにどうしてチャレンジし続けるのか?、というリ

「殺人事件の話はいいのに震災はだめなのか」

アリティのなさが目立ってしまう」

私がノリで提案した「海保初の女性潜水士」は、男子陸上100m走の日本記録に挑もうとしている女子陸上選手、みたいなものなのでしょう。

あーでもないこーでもないと編集担当と意見を出し合っていたとき、最近の学生さんたちはどんな動機で海上保安官になるのかという話になりました。

『海猿』人気もよく聞きますが、東日本大震災で被災したことがきっかけで海上保安官になる方もいるみたいですよ」

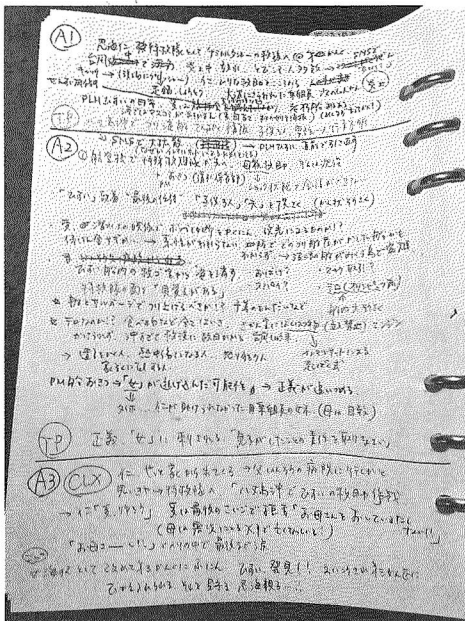
編集担当が食いついてきました。

「それでいいんじゃないですか。説得力はある。そういう大きな経験があると、どんな苦境でも乗り越えようとするのではないか」

私は即座に首を横に振りました。

「震災のことは書きたくないで

執筆前に作成した構成表。ここから作品が生まれた



す。私が書くのはエンターテインメント小説で、私はこれでお金を稼いでいます。あの震災をネタに金を稼ぐことになる。被災者のことを考えると、とてもで

きないです」

震災から今年で丸10年たち、いままでこそ震災を扱ったドラマや映画、小説は出てきましたが、2019年当時はまだ少なく、発生してから5年くらいは「震災の話には触れない」という不文律がエンタメ出版業界の中にはありました。私のシリーズ作品の中で最も古い『原麻希シリーズ』は2011年1月に第1作目が発売、現在までに12作を出版していますが、震災はなかったことになっています。シリーズの中で震災に触れているのは2016年以降に出た作品のみで、帰宅困

難者になったとか、家にあった大事なものが壊れたとか、その程度です。真正面から震災と被災者のことを書いたことはありません。あの出来事をエンターテインメントとして消費することに大きな抵抗感があったのです。私はきっぱり断りました。

「震災の話は書きません」

そう断言した途端、ふと頭の中に浮かんだ自問——。それは、ミステリー作家として、これまで何件の殺人事件を自分は書いてきたのか、ということでした。中には実際に起きた事件からインスパイアされたものもあります。殺人はいいのに震災はだめなのか。人が1人死ぬのはよくて、大勢はダメなのか？

何人までならいいのか？エンターテインメントして消費していいものとダメなもの、その線引きってなんだろう？私は作家としての倫理の沼にハマってしまいました。

(つづく)

作家としての倫理の沼にハマってしまいました